

## いろいろ

先日、娘夫婦が孫の小学校入学を機に、1年間の海外勤務から帰ってきました。

ある日、孫が、

「おじいちゃん、お絵かきしよ！」

と、誘ってきたので、二人で絵を描いていました。しばらくして、私が、

「肌色、貸して。」

と、頼むと、首をかしげて、

「・・・肌色って？」

「顔とか手とかの色だよ。」

と言うと、また、困った顔をして、少し考えた後、何かひらめいたように何本かのクレヨンを手にとつて、

「はい、どうぞ。」

と、差し出してきました。今度は、私の方が訳が分からず、キョトンとしていると、

「キンダーガーデンには、いろんな肌色のお友達がいたから。」

という言葉に「ハッ」としました。

孫が差し出しているクレヨンの中から、私の思っていた肌色を選び取ると、そこには、『うすだいたい』と書かれていました。

その日の夕食の時に、クレヨンのことを話すと、娘が私の顔を見て、

「お父さん、肌色が『うすだいたい』とか『パールオレンジ』に変わったのは、10年以上前のことよ。いろんな肌の色の人がいるのだから、当たり前ね。」

と言うと、続けて、つれあいが言いました。

「決めつけた考え方にならないように、変えていくことは大切ね。私達が子どもの頃は、まだ、『男だから、女だから』って、決めつけた考え方が、とても強かった。」

「そういえば、ちょうど私が小学生の時、出席番号が男女別から、男女混合になったわ。私は『なんで、いつも女子は後ろなの』と思っていたから、何か嬉しかったわ。」

「学校もどんどん変わっているんだねえ。」

「お母さん、海外の学校では、心と体の性が一致しない子のために、男女のどちらもが使えるトイレの設置が始まっている所もあるのよ。」

「そういえば、日本でも、子どもが自認している性別の制服を認める学校があると、ニュースで聞いたことがあるわ。」

私は、二人のやりとりを聞きながら、『知らない間に、どんどん変わっているんだなあ。社会の変化に取り残されてしまっているじゃないか。』と、ぼんやり考えていました。すると突然娘が、

「ところで、お父さん、今度ランドセルを買いに行くけれど、女の子だから、赤色にさせようなんて考えてない。」

と、尋ねてきました。私は、

「そ、そんなことはないよ。」

と、とっさに答えましたが、内心、『痛いところを突かれたな。』とひやひやしていました。

そして、孫の顔を見ながら、『この子の感性に学ばされたなあ。この子に決めつけや思い込みをさせてしまわないよう、自分の感性を磨いていかないといけない。』と思いました。